無痛分娩の標準的な説明文書

無痛分娩のご紹介

当院では、妊婦さんのご希望に合わせて、無痛分娩（産痛緩和）をおこなっています。産婦人科医・麻酔科医・助産師により安全な分娩を実施できる体制を整えております。
無痛分娩では麻酔科医の協力は不可欠で、陣痛が平日の日中になるように調整することで、より安全に行うことが可能となります。そのため、無痛分娩をご希望の方は、計画分娩（後述）としております。原則として夜間・休日に陣痛発来・分娩となった場合は、対応できないことをご承知おきください。
また、痛みについては緩和を目的としており、完全な無痛を達成することは困難です。痛みの感じ方は個人差があり、納得のいく疼痛緩和が得られない事もあります。

当院の無痛分娩の方法

「硬膜外麻酔」と呼ばれる背中から細いカテーテルを挿入し、局所麻酔薬の注入による調節可能で持続的な痛み止めの方法により行っています。
麻酔を開始してから分娩までは、妊婦さんの痛みの程度に応じて、痛み止めを追加調節してきます。産科医・麻酔科医が定期的に訪問し、陣痛の痛みや胎児の状態、副作用を確認しつつ行います。

計画分娩について

通常は、自然に陣痛が来るタイミングまで日常生活を送りながら待機し、陣痛が来たタイミングで入院して出産します。一方で、計画分娩の場合は、自然に陣痛が来る前に入院します。準備を整えた状態で、陣痛促進剤を投与します。薬に反応し、陣痛発来すれば出産となります。
陣痛促進剤を使用することとなりますが、あらかじめ様々な準備を整えることができる点、人員の多い日中に分娩できる点でメリットがあります。
当院では無痛分娩希望の方について、妊娠３９－40 週頃を目安に分娩を行えるように計画しています。具体的には、妊婦健診の際に内診で子宮口の状態を評価し、分娩に向けて整った状態であるかを判断します。整った状態と判断した場合には、およそ１週以内の入院・分娩の時期を妊婦さんとご相談します。医学的に早く分娩にした方が良い状況である場合には、より早い時期に予定を組むことがあります。

無痛分娩の実際

＜入院日＞
分娩誘発を行う前日に入院となります。午前 10 時ころに入院となります。胎児心拍数陣痛図により胎児が元気であることを確認します。子宮口の状態を確認し、必要時には子宮頸管拡張処置を行います。午後に硬膜外カテーテルを挿入、留置します。
＜入院翌日＞
朝から陣痛促進剤点滴、あるいは子宮頸管熟化剤腟内留置を行います。無痛分娩の方は、食事やお茶、ジュースなどは摂取ができません。水は飲むことができます。陣痛が来て、痛みがつらくなった時点で硬膜外麻酔を開始します。麻酔薬を開始後は、飲水はできますが、食事はできなくなります。必要に応じて、硬膜外カテーテルから麻酔薬を追加し、痛みの緩和を図ります。効果が不十分な場合には、カテーテルの再挿入を行うことがあります。
分娩後、会陰縫合などの処置が終了した段階で、硬膜外カテーテルを抜去します。

無痛分娩のメリットは？

硬膜外麻酔によりお産に伴う痛み（産痛）を緩和し、痛みではなくお産そのものに向き合い、リラックスして出産することができます。
結果として、妊婦さんの体力の消耗を抑えること、産道の柔軟性が弱い（年齢が比較的高い方など）場合はお産の進行を促進する可能性が知られています。また、出産のストレスを軽減する必要のある持病（一部の心臓や血管の病気、過呼吸が悪影響を及ぼす可能性のある呼吸・神経疾患など）や血圧が高い方にはメリットがあると考えられます。
出産後の創の縫合などの処置においても鎮痛効果が期待できます。加えて、途中から帝王切開が必要になった際にも、無痛分娩の麻酔薬を変更することにより、迅速に帝王切開の麻酔を行うことができます。
ただし、使用している薬（血液が固まりにくくなる薬）や持病、背骨の変形が強かったり手術をされている場合など、硬膜外麻酔を行うことが難しかったり十分な効果が得られない場合もあります。

無痛分娩のリスクは？

1）麻酔・処置に伴う合併症
硬膜外カテーテルの挿入や麻酔に伴い、穿刺部痛、感染、神経障害、血圧低下、かゆみ、発熱、嘔気、高位麻酔、局所麻酔薬中毒が生じることがあります。いずれも数%以下の頻度とされています。

痛みやかゆみ、発熱、嘔気などは症状が強い場合には症状を軽減する薬剤を使用して対処します。発熱などは原因検索のために血液検査などが必要となることがあります。神経障害は数日程度で消失することも多いですが、まれに年単位で症状が残ることがあります。高位麻酔などの際には、挿管・人工呼吸器管理が必要となることがあります。頭痛、硬膜外血腫、穿刺部血腫による神経障害、感染は遅発性に生じることがあります。

2）分娩への影響

子宮口が開いてから赤ちゃんが産まれるまでの時間（分娩第 2 期）が無痛分娩をされていない方と比べて長くなります。また赤ちゃんが最後に産道から出る時に、鉗子分娩・吸引分娩などの器械を使ってのお手伝いが必要となる可能性が上昇します。

3）赤ちゃんへの影響

無痛分娩による赤ちゃんへの直接的な作用はほとんどありません。お母さんの血圧が下がると赤ちゃんにも影響があるため、お母さんの安全を確保することが大切と考えています。赤ちゃんの治療が必要な場合は、当院の小児科医が担当します。

より詳しく知りたい方は、日本産科麻酔学会の Q&A も参照ください。
（https://www.jsoap.com/general/painless）

無痛分娩の費用・申込について

通常の分娩費用に加えて麻酔時間が 10 時間以内の場合 12 万円、10 時間超の場合 15 万円の追加費用(自費診療)がかかります。
この費用は、硬膜外カテーテルを挿入したした時点で発生します。麻酔時間の長さや麻酔の効果により麻酔料金は変わりませんが、入院費用は入院日数により変わります。
もし無痛分娩中に帝王切開が選択された場合は帝王切開の費用がかかり、その分については保険診療の対象となります。　ご希望の方は、妊婦健診時に担当医にお申し出下されば、説明・同意書をお渡しします。同意書を妊婦健診時に医師にご提出頂くことで申込となります。計画分娩を予定するため、遅くとも妊娠 34 週までにご提出下さい。

相談窓口

無痛分娩について、質問・相談がある方は、外来受診時に助産師・受付にお声かけください。